

研究の概要

小 林 隆

1 調査の目的

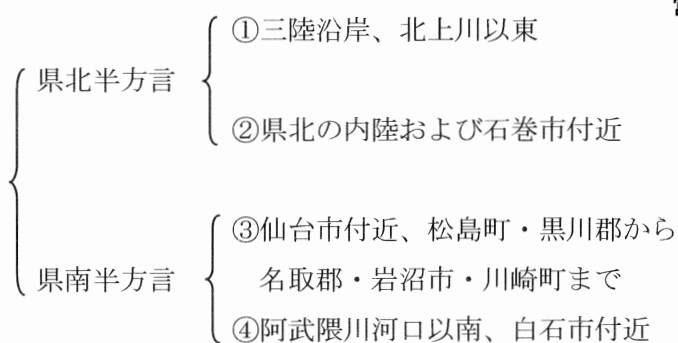
本書は、東北大学国語学研究室が 2005 年度から 2007 年度にかけて、宮城県北部の沿岸地域に位置する気仙沼市と、宮城・岩手両県にまたがる三陸地方南部地域で行った方言調査の報告である。

東北大学国語学研究室では、これまで東北地方各地の方言調査を続けてきた。特に 1995 年度以降は宮城県内にフィールドを定め、調査を進めてきた（末尾の「文献」にその報告書を載せた）。このうち、小林隆編（2003）で取り上げた宮城県石巻市の北方に位置する地域として、気仙沼市を選んだ。また、その気仙沼市を中心に対象地域を南北に拡大し、宮城・岩手にまたがる三陸地方南部地域についても調査を行った。

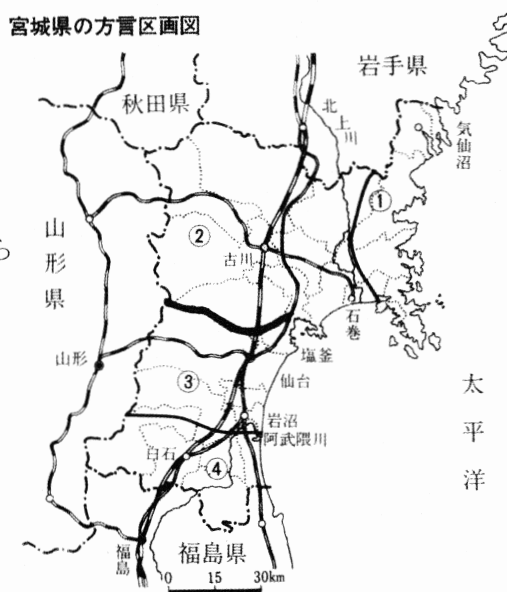
本調査の目的は、大きく次の 3 点である。

- (1) 気仙沼市方言における伝統方言の記述を行う。
- (2) 気仙沼市方言における方言の動態を明らかにする。
- (3) 宮城・岩手にまたがる三陸地方南部地域の方言の分布と動態を把握する。

(1)は気仙沼市における伝統的な方言を、記述方言学的方法により解明しようとするものである。気仙沼市の方言は、下に示す加藤正信（1992）の分類では、県北半方言の①に分類される。この地域は、比較的均質的と言われる宮城県方言の中で、岩手県沿岸部の方言とも通じるやや独特な位置を占めており、どのような方言が話されているのか、調査によって明らかにしたいと考えた。共通語化による伝統方言の崩壊が著しい今日、気仙沼市方言を正確に記録しておくことは緊急の課題で



あるとも考えた。また、(2)は同じく気仙沼市方言を対象とし、その世代別変化を追おうとするものである。この調査により、伝統的方言の維持と衰退、新しい方言の出現の様子などが明らかになると予想した。そして、(3)は



三陸地方南部地域の方言について知るとともに、その中での気仙沼市方言の位置を把握しようと意図したものである。

なお、今回の調査地域は、佐藤喜代治・加藤正信（1972）で対象とした範囲と多く重なる部分があり、加藤正信ほか（1982）の報告と接する地域でもある。それらの過去の調査との比較も興味深いと考えた。

2 調査の方法

調査は3年間にわたって行った。小林が担当する授業「方言調査法」の中で準備を進め、夏休みを利用して調査を実施した。そのねらいと方法は次のとおりである。

【2005年度】 2005年7月30日～8月1日

1年目にあたる2005年度は、気仙沼市方言の記述調査を行った。主として高年層を対象に方言のしくみについて詳しく調べると同時に、年齢差や使用状況についても大まかな傾向を把握し、次年度の多人数調査の準備とした。話者は気仙沼市出身で、調査当時同市在住の話者45名。世代別の内訳は以下の通りである。

高年層（60歳以上） 30名

中年層（40・50歳代） 5名

若年層（20・30歳代） 10名

調査項目は、音韻、アクセント、語彙、文法、言語行動などさまざまな分野に及び、企画担当者が設定したテーマごとに比較的詳細な調査票を用意した。調査は現地に赴き話者から聞き取りを行う臨地面接調査法を採用した。

【2006年度】 2006年7月30日～8月1日

2年目にあたる2006年度は、前年度の結果をもとに、気仙沼市方言の世代別多人数調査を行った。話者は気仙沼市出身で、調査当時同市在住の話者74名。世代別の内訳は以下の通りである。

高年層（60歳以上） 22名

中年層（40・50歳代） 17名

若年層（20・30歳代） 15名

少年層（高校生） 20名

調査項目は、前年度同様に多岐にわたるが、本年度は1テーマ2ページ程度の割り当てにより、統一調査票を作成した。ただし、調査方法は面接調査とアンケート調査の両方を用いたので、使用した調査票は2種類となる（それらの調査票は、この報告書末尾に付録として収めた）。

【2007年度】 2007年8月1日～8月3日

3年目にあたる2007年度は、前年度までの気仙沼市の南北に調査地域を拡大し、宮城・岩手両県にまたがる南三陸地方の方言の分布状況を明らかにすることをねらいとした。具体的な調査地点は図の26地点である。

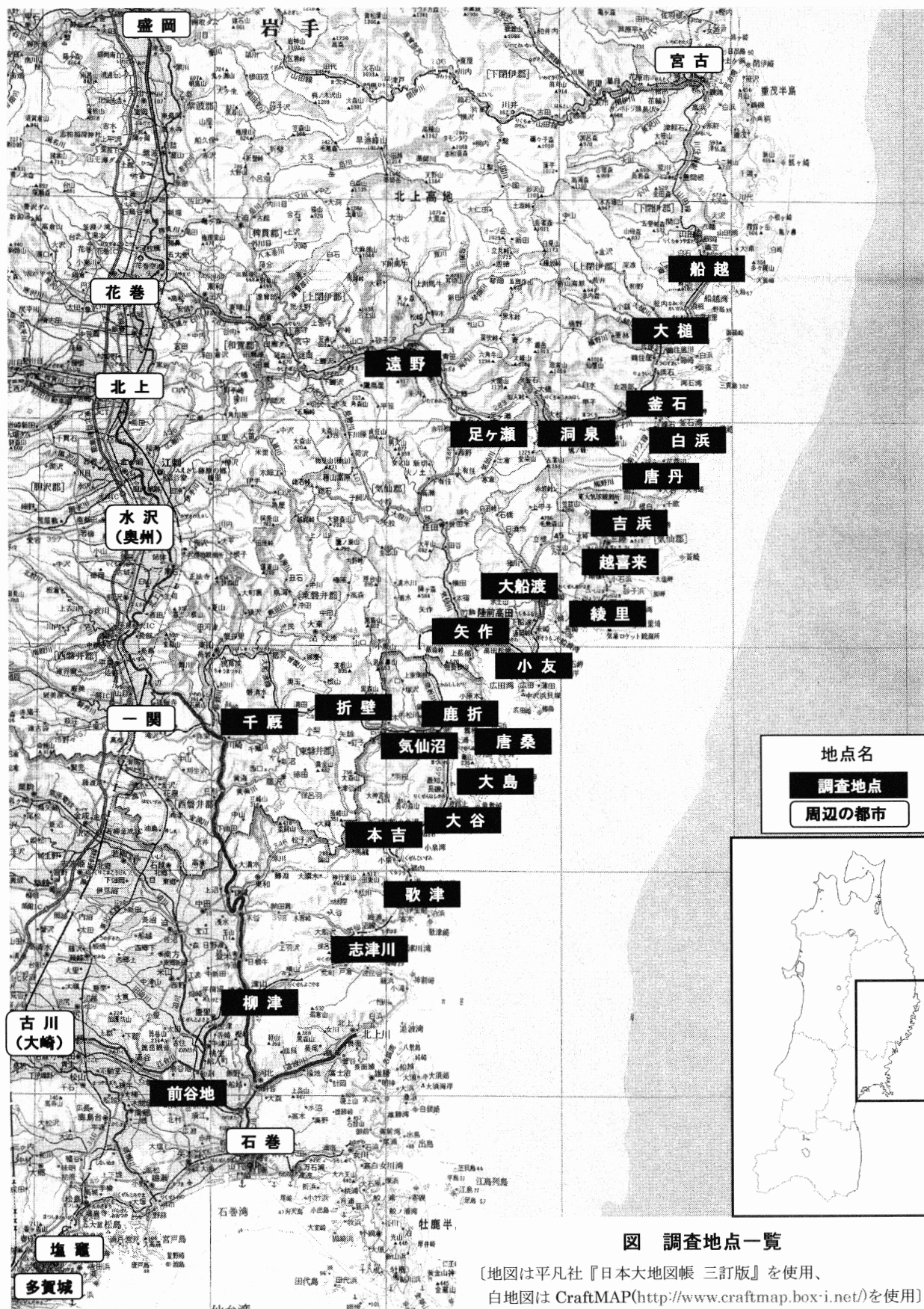


図 調査地点一覧

〔地図は平凡社『日本大地図帳 三訂版』を使用、
 白地図は CraftMAP(<http://www.craftmap.box-i.net/>)を使用〕

岩手県 下閉伊郡山田町船越
上閉伊郡大槌町大槌
釜石市釜石
釜石市白浜（平田）
釜石市唐丹
釜石市洞泉
遠野市足ヶ瀬
遠野市遠野
大船渡市吉浜
大船渡市越喜来
大船渡市綾里
○大船渡市大船渡
○陸前高田市小友
○陸前高田市矢作
○一関市折壁
○一関市千厩

宮城県 ○気仙沼市唐桑
○気仙沼市鹿折
○気仙沼市気仙沼
気仙沼市大島
○本吉郡本吉町大谷
○本吉郡本吉町本吉
○本吉郡南三陸町歌津
○本吉郡南三陸町志津川
○登米市柳津
石巻市前谷地

話者はすべての地点で高年層（60・70 歳代）を対象としたが、上記の一覧で○印を付けた地点については若年層（20・30 歳代）も調査し、世代的な変化をも把握しようと考えた。

調査内容はさまざまな分野にわたるが、調査票は各テーマ 2 ページという割り当てのもとで統一調査票を作成した（本報告書の末尾に付録として掲げる）。調査は現地面接法によって行った。

3 協力機関

調査の実施にあたっては、話者の推薦から調査会場の準備に至るまで、次の機関から多大な協力を得た。

【2005 年度】

気仙沼市教育委員会生涯学習課、気仙沼市松岩公民館

【2006 年度】

気仙沼市教育委員会生涯学習課、気仙沼市松岩公民館、気仙沼高等学校

【2007 年度】

山田町教育委員会社会教育チーム、大槌町教育委員会社会教育課、釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課、遠野市立博物館、大船渡市立博物館、陸前高田市教育委員会生涯学習課、一関市教育委員会室根支所教育文化課、気仙沼市教育委員会生涯学習課、本吉町教育委員会生涯学習班、南三陸町教育委員会生涯学習課、登米市教育委員会生涯学習課、石巻市教育委員会生涯学習課

4 調査組織

調査は東北大学国語学研究室で方言学を専攻する大学院生たちが中心になって企画・運営した。特に幹事・副幹事が全体を統括し、調査を導いた。また、この調査は授業の実習指導も兼ねているため、学部生や研究生・聴講生たちも準備から実施に至るまで作業を行った。さらに、企画段階から外部の研究者にも参加してもらい、共同研究として計画を進めた。3年間の調査の参加者を以下に掲げる(教員等の肩書は最初の参加年度に示し、次年度以降は変更のあった場合のみ記す。また、*は調査の幹事を、**は副幹事を示す)。

【2005年度】

教員等：小林隆（東北大学教授）、佐藤亮一（東京女子大学教授）、齋藤孝滋（フェリス女学院大学教授）、竹田晃子（盛岡大学非常勤講師）、櫻井真美（山形大学非常勤講師）

大学院学生：玉懸元（研究助手）、作田将三郎、王秀芳、**椎名渉子、*田附敏尚、梁敏鎬、川越めぐみ、中西太郎、アクセノフ・ユージン、大久保拓磨、佐藤志帆子、刀禰累佳、三浦佑子

学部学生：小寺絃子、堀岡大介、相川美保、小田成紘、木村雄人、島谷夏美、鈴木彩子、須田小百合、須藤淳美、橘しおり、野末奈緒美、若見直樹、脇田夏実

【2006年度】

教員等：小林隆、佐藤亮一、齋藤孝滋、武田拓（仙台電波工業高等専門学校助教授）、半沢康（福島大学助教授）、大橋純一（いわき明星大学助教授）、竹田晃子（奥羽大学非常勤講師）、櫻井真美

大学院生：玉懸元、作田将三郎、王秀芳、*椎名渉子、田附敏尚、梁敏鎬、川越めぐみ、**中西太郎、吉田雅昭、内間早俊、澤村美幸、安本真弓、王其莉、加藤典子、小松さと子、楊雅銀

学部学生他：井口泰志、今仲鹿島、関根あゆみ、中島大、半田由仁葉、朴黄珍、山口香苗、岡貴和子、古川夕紀、魏ふく子（東京女子大学）（以上、学部学生）、金賢貞（特別聴講生）

【2007年度】

教員等：小林隆、田中宣廣（岩手県立大学宮古短期大学部准教授）、大橋純一、竹田晃子、櫻井真美

大学院生：櫛引祐希子、椎名渉子、田附敏尚、梁敏鎬、**川越めぐみ、*中西太郎、内間早俊、澤村美幸（日本学術振興会特別研究員）、小松さと子、吉田智子、魏ふく子、久田悠子、プラカーイキエート・ヤオワパー、韓燕傑、鄭嘉玫、ジスク・マシュー、チラクルウィワット・ピヤナット

学部学生他：李青（派遣研究員）、黄孝善、加藤綾子、金崎えり、菅美里、小林翔、佐藤奈緒、須藤京子、木暮恵、瀧澤佳子、田中千景、徳宿道子、溝口真、森山望、吉川芳（以上、学部学生）、レムケ・サビネ（特別聴講生）

5 報告書の作成

この報告書は、各企画者が自ら担当したテーマについて執筆を行ったものである。ただし、調査内容のすべてを報告できたわけではない。テーマ自体が取り上げられなかった場合もあるし、執筆

者によって、南三陸地方全体を視野に入れたものもあれば、気仙沼市に焦点を当てたものもある。未報告の内容については、今後、個別の論文等のかたちで公表していきたい。

なお、報告書の編集にあたっては、以上の調査の幹事であった田附敏尚、椎名渉子、中西太郎、および、2011年度の調査幹事である津田智史の協力を得た。

文 献

加藤正信（1992）「各地方言の解説－宮城県方言」平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』1、明治書院

加藤正信・遠藤仁編（1998）『宮城県中新田町方言の研究』科学研究費成果報告書

加藤正信・小林隆・大橋純一・竹田晃子（1997）「宮城県中新田町方言の記述的調査報告」『東北文化研究室紀要』38

佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『東北文化研究室紀要』12・13（井上史雄他編 1994『日本列島方言叢書 3 東北方言考 2』ゆまに書房に再録）

加藤正信・佐藤和之・小林隆（1982）「宮城県北地方の方言調査報告」『東北文化研究室紀要』23（井上史雄他編 1994『日本列島方言叢書 3 東北方言考 2』ゆまに書房に再録）

小林隆編（2000）『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

小林隆編（2003）『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

小林隆編（2011）『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

小林隆・李範錫・竹田晃子・瀧川美穂（1999）「宮城県仙台市方言の記述的調査報告」『東北文化研究室紀要』40

小林隆・竹田晃子・玉懸元・佐藤祐希子（2002）「宮城県石巻市方言の記述的調査報告」『東北文化研究室紀要』43

【謝辞】

末尾になりましたが、調査に当たりお世話になりました話者のみなさま、および、協力機関の方々に、心よりお礼申し上げます。個人情報保護の観点からお名前を挙げることは控えますが、みなさまのご協力なくしては、この調査は実現しませんでした。ここにあらためてお礼を申し上げ、感謝の意を表します。